

● 学校支援情報 ●

岡崎むかし館通信

<http://www.libra.okazaki.aichi.jp/16000.htm>

むかし館活用事例や郷土学習のヒントなどの情報を発信します。



1 学期も残りわずか。今年の夏休みも「夏休み子ども体験講座」を開催します！

むかし館のあれこれ — 活用・教材化へのヒント — 「臼」

臼とは、穀物の脱穀や製粉、餅つきなどに用いる道具を指します。臼には、碾き臼と搗き臼の2種類があります。今回は、碾き臼の一つである石臼について考えてみましょう。

石臼は石器時代以来、穀物、肉類、顔料などをすりつぶすのに用いられた深い石皿から発展してきます。縄文時代は、厚みのある石を鉢状に深く窪ませたものを使用していました。古墳時代になると赤色顔料の精製に用いられたものが多く発見されています。

今回教材として取り上げる、碾き臼(上臼と下臼が対をなし、上臼が回転して磨り潰す方式の石臼)は、古代オリエントのロータリーカーンや中国漢代の石磨(せきま)を起源としています。日本には奈良時代に伝わり、室町時代後期から江戸時代にかけて五穀を粉にする農民の必需品として普及します。また、下臼に受け皿のある小型石臼は「茶臼」と呼ばれ、室町時代後期以来、抹茶の生産に使われました。日本の碾き臼は江戸時代に形が整えられ、その独特の形態は挽き手の取り付け方などによって地方色が見られます。大きく東海型・京都型・江戸型に分類できます。写真に示した石臼は東海型です。東海型の特色は、挽き手を外側に取り付け竹箍(たが)で固定する点にあります。京都型は、挽き手を上臼に差し込むように取り付け、江戸型は上臼に木製柄台を付け竹箍で固定する点に特色が見られます。

石臼で一番大切な部分は、上臼と下臼の擦り合わせる面の微妙な「隙間(＝ふくみと言う)」と「目立て」だと言われています。岡崎は石都としてその技術を伝承している数少ないマチです。岡崎産の石臼も数多く全国に発信しています。



ぜひ子どもたちと一緒に石臼を体験し、その技術の確かさを実感してみてください。【N】

今回は、屋根神について報告をします。

屋根神(＝^{のき}軒神)とは、愛知県や岐阜県などで多く見られる屋根の上に^{まつ}祀られた^{ほくら}祠のことを指します。岡崎市には、能見町に2カ所、十王町に1カ所祀られています。能見町にある2カ所のうち一つは、足助街道の神明宮入口交差点の北西角の軒上に祀られ、もう一つは、これより約100[㍎]南の足助街道東側の2階の窓近くに祀られています。これらは、もともとは能見町の北端と南端にあたる街道筋の家の屋根に祀られていたそうですが、昭和41年の道路拡張に際して、現在の所に移されました。

能見町では、マチの守護神として小祠を軒上に祀り、この祠の中に秋葉神社(火伏の神)の神札が納められています。町屋にとって火事は大敵です。町内を火事から守ろうとする人々の願いがこのようなところにも表れており、秋葉神社、秋葉常夜燈などを祀ることへつながっていきます。屋根の上にぽつんと祀られている小祠にも多くの人々の「願い」がたくさん詰まっていることを忘れないでください。

【N】



むかし館では道具の貸出も行っています。今回紹介した石臼も、借りる方で運搬を要しますが、貸出可能です。使い方がよくわからないという場合は、「出前授業」を申込みしていただくと、先生方の授業のねらいに応じて、むかし館スタッフが道具を学校へ持参して使い方も説明します。(もちろん、子どもたちに体験してもらいます。)

こうした道具の大半は、市民の方から寄贈していただいたものです。掃除をしてから資料として台帳に記録し、子どもたちに活用してもらえるように随時整理しています。

●編集/発行(隔月) 岡崎市立中央図書館・企画班 平成25年7月

〒444-0059 岡崎市康生通西4-71 tel.23-3167 / fax.23-3165

【企画展「岡崎のまつりー大嘗祭悠紀斎田ー」～9/10まで開催中】

＜夏休み子ども体験講座「見て触れて感じよう むかしの生活」＞

◇日時 7/27(土)～29(月)、8/4(日)～6(火) 10:00-11:30

◇場所 図書館交流プラザ(りぶら)1階・岡崎むかし館

社会科自由研究相談のほか、今年は「夏の道具」を中心に紹介します。